

紀要発刊を視し, 明治開明期の郷土医学界の基礎を築いた人々の覚書

著者	高瀬 武平
雑誌名	福井医科大学一般教育紀要
巻	1
ページ	1-9
発行年	1981-12
URL	http://hdl.handle.net/10098/5305

紀要発刊を祝し、明治開明期の郷土医学界の基礎を築いた人々の覚書

高瀬 武平

福井医科大学 学長

(昭和56年11月13日 受理)

I. いとぐち

かねて要望されていた本学紀要が各方面の好意ある取り計らいによりようやく実現のはこびとなり、ここに第1巻を世に問うことができるようになりました。従来、発表の場が必ずしも無制限に提供されているとは限らず、隔靴搔痒の感なきにしも非ずの憾みがありましたが、ここにその場が提供されました。各位奮って投稿していただき、益々将来発展の途を辿られんことを祈ります。

私は本学へ参りましてから近辺の地を折にふれて好んで訪れていましたが、福井県は他に類をみない程医学の先進県でありました。それらの人々が現地を離れたのは、当時(明治維新前の頃)の社会状況により、有用な人は中央へスカウトされて医学研究の中核的人材が稀薄になったためと思われまます(橋本左内がその代表例)。そこで、本紀要第1巻の初刊に際して、越前・若狭における近代医学史第一線に活躍を志した人々を列記し、なおかくれた先人を掘りおこすよすがとして頂ければ幸甚であり、以下、列記する。

II. 近代医学史第一線に活躍した人々の年代配列

(1) 1752年(宝暦2)

吐方の考案——奥村良筑(1686—1760)府中、山脇東門、永富独嘯庵(1731—1766)。

奥村良筑は、1716年京都に遊学し、並河天民・後藤良山・松岡怒庵に学ぶ。中国の張子和著述の「儒門專親」を学習し、吐方の発見・復活を決意した。辛苦の末、甜瓜の3種の中、その先端が小さく、碧色のものが、その蒂を吐方に用うべきであると結論した。彼の吐方の権威は京都にも知れ渡り、1752年山脇東門はその嗣子東門を吐方研究のため良筑の下へ留学せしめた。永富独嘯庵も命ぜられて同行した。

永富は山口豊浦の人。1761年大阪船場備後町5に開業し、1764年医事評論集「漫遊雑記」を著述し、病理解剖の必要性を力説した具眼の士であった。「吐方考裏話」を著述している。

(2) 1754年(宝暦4)

我国解剖の始め——小杉玄適、原松庵、伊藤友信(小浜藩)、山脇東洋。

「臓志」記載着手——山脇東洋(49才)(1705-1762)、杉田玄白(22才)(1733-1817)小浜藩、外科医 Johann Vesling (1598-1649)。日本自著解剖書の始め。

小浜藩の小杉・原・伊藤の働きかけで京都所司代酒井忠用が解剖を許可し、1754年(宝暦4)2月7日、紙屋川筋の西土手の六角通りの刑場で男子斬首刑屍体の解剖を行った。「臓志」、日本最初の解剖書は82枚からなり、1759年発表した。西洋書の正しい内容を認めてこの書を書くことを決意したもので、東洋の見た蛮書はヨハン・ヴェスリングの解剖書(1641年出版)であった。

人体を知らずに医学を学ぶことは大に不合理であることを戒めていたこと、西洋医学書の最初の紹介が解剖書から始まったことは極めて幸いであつたし、又極めて重大意義のあることであつた。

(3) 1757年(宝暦7)

江戸湯島に最初の薬品会開催——中川淳庵(1738-1786)(小浜藩)、宇田川玄隨(1767-1834)、田村元長。

1766年「薬品会目録」1巻—中川淳庵著述。

1764年(明和1)「火浣布略説」——平賀溪川著述、中川淳庵指導。

中川は、石綿にて作りたるものにて火に焼けぬ布、石綿なるものを蘭書により知り、火浣布を作ることを欲し、平賀に謀った。平賀は、秩父山から出る石綿を以て織り出し、一寸ばかりの小織物を創作し、世に隔火(香敷)として示した。時の人は甚だ驚嘆した。香敷とは炭火の上に置き、香を焚くのに用いるものである。

(4) 1767-1768(明和4-5)

杉田玄白と和蘭陀大通詞西善三郎の問答——杉田玄白・前野良沢。和蘭甲比丹江戸に入貢し、杉田・前野、日本橋本石町長崎屋源右エ門方にて大通詞西善三郎について疑問を質した。

蘭外科医バブル医の刺絡術見学——杉田玄白・前野良沢(1723-1803)、1768年和蘭カピタン、ヤン・カラン江戸に入貢し、外科医医師来る。客館に於て、バブルは川原元伯という医師の舌疝を診察し、刺絡の術を施した。杉田・前野はその精妙に驚いた。

(5) 1771年(明和8)

小塚原刑場解剖観臓——杉田玄白(37才)(1733-1817)、前野良沢(49才)(1751-1809)、中川淳庵(33才)(1738-1786)、桂川甫周(1751-1809)。

3月4日千住の骨ヶ原(別名小塚原)へ、ターヘルアナトミアを玄白と淳庵が別々に持参していた。偶然に2人は驚く。1722年、Johann Adam Kulemus(1689-1744)、ドイツ・ダンチッヒの医者が著作したもの。1734年、和蘭のGerardus DICTENが蘭訳した。On:leedkundige Tabellen と題する簡明解剖書であった。

紀要発刊を祝し、明治開明期の郷土医学界の基礎を築いた人々の覚書

「解体新書 (Tavel Anatomia)」5巻、訳著着手——完成1774年。クレムス解剖書 J. A. Kulems (1689-1745), 1722年, (蘭訳1734年)。

3月5日, 前野良沢の家(中津藩主奥平家の江戸屋敷〔築地鉄砲洲)の中にあつた。——今の中央区築地明石町聖路加国際病院内蘭学創始の記念碑あり)。同席者, 杉田・前野・中川は同席, 桂川甫周・嶺春泰・石川玄常・桐山正哲・鳥山松円が加盟する。前野のみ少し蘭語を知っていた。

○「解体新書」の参考書

(1) 1722 クレムスの解剖書 Kulemus Johann Adam (1689-1744)

1734 蘭記 Gerardus Dicten → 題目 { Ontlecdkundige Tabellen }

(2) バドリウス解剖書(別名カスバル解剖書)デンマーク Bartholius Thomas (1616-1680)

(3) 1641 ヘリンスキーマ解剖書 Veslingius Johannis (1598-1649) 独伊の蘭訳

(4) 1688 ブランカル解体書(和) Blankaart Steven (1650-1702)

(5) 1719 パルフィンの外科人体解剖書(和) Pulfijin Yohan (1650-1730), 1822年斎藤方策・中環にて訳されたもの。

(6) ハミルトン解剖書

(7) ミスケル解剖書

(6) 1790年(寛政2)

「痲医新書」50巻, 西洋外科書の始め——杉田玄白・大槻玄沢(1757-1827)。

1718年 Lorenz Heister (1683-1758) 著, 外科医のための外科創傷篇, 外科医書出版(独), 欧州で広く親しまれた本。1792年刊行。玄白から玄沢に引きつがれたが, 50巻全部出版には至らなかった。全般外科の紹介には至らなかったが, 西洋外科書翻訳の最初ではあつた。

(7) 1798年(寛政10)

「重訂解体新書」稿完成——杉田玄白, 大槻玄沢(1757-1827)。

玄沢は, 恩師杉田玄白の命によりクレムス解剖書を訳し直したが, 出版は1826年, 玄白歿する前年実現した。序文・凡例1冊, 本文4冊, 名義解6冊, 附録2冊, その名義解と附録は玄沢の著書といわれるものである。

(8) 1805年(文化2)

福井藩医学所済世館開設, 福井医学教育の初め。浅野道有(1765-1830)は福井藩匙医であつた。彼の建義により出願。6月2日, 浅野の居宅で開講した。講師は勝沢一順・妻木栄輔。毎月2・6・8の日に授業。傷寒論・要置要略・本草綱目を講じた。

(9) 1808年(文化5)

越前蘭方医の始め——西島俊庵(1783-1810)鯖江藩。

15才で江戸に出, 杉田玄白・大槻玄沢に法学を学び, 又長崎へ行き修業。文化5年, 小塚原屍体解剖の節は玄白・玄沢の助手をした。1808年, 鯖江で蘭方外科医を開業。その技術は世を驚

かせたが、1810年、24才で死亡。

(10) 1815年（文化12）

「蘭学事始」完成——杉田玄白・大槻玄沢。

玄白は、「解体新書」翻訳当初より苦心した経歴を記し、2冊となし、門人大槻玄沢に与えた。文化12年4月、玄沢はこれをまとめて玄白に進呈した。これが「蘭学事始」である。

玄白、1817年4月17日、85才で江戸に歿し、墓は今の東京芝区西久保巳町栄閑寺にある。

玄白の子立郷、孫成郷と3代続いた蘭学者の家で、時の将軍に拝謁を賜ったという。

「眼科新書」、西洋眼科書翻訳の始め——杉田立郷（1738—1807）（千家）眼科書（オーストリア）プレンキ J.J. Plenck（1738—1807）1777版・1783版2版。蘭訳された書〔Poctorina de morbis oculorum〕

(11) 1821年（文政4）

「微瘡新書」5巻、西洋梅毒書の始め——杉田立郷。

プレンキ J.J. Plenck 著、梅毒学1779版ラテン語。この独訳から蘭訳されたものを、1818年和蘭使節中の船医から得たものを邦訳した。

(12) 1822年（文政5）

「解臟図譜」1冊、福井藩の解剖書の始め——池田冬蔵（1784—1836）。

京都西刑場の解臟。2月16日刑死、23才。京都の小森桃塙外122人参加。越前池田冬蔵、鳥山見庵（府中の人）が参加。

冬蔵は福井の医師、桃塙の門人。1836年（天保7）9月29日歿、52才、福井願乗寺（現小林保正家の隣）に葬る。

(13) 1823年（文政6）

シーボルトについて学ぶ——竹内玄同（1795—1880）、丸岡藩医、幕府奥医師、西洋医学所長。

名は正幹。丸岡藩医。シーボルト初期の塾外生17人の1人。西洋内科医術の功労者。将軍家定の奥医師、西洋医学長となる。1880年（M13）1月12日歿、76才。東京赤坂区青山南町梅窓院に葬る。

○シーボルト（Siebold, Philipp Franz von）（1796—1866）

Würzburg 生れ。1822年、大学卒。医師。和蘭東印度会社に奉職。来日、1823年7月7日。長崎上陸、27才。同年、長崎鳴滝塾開設。1824年、鳴滝塾の講義。患者診察、臨床講義、腹水穿刺、腫瘍剔出術の他、眼科・産科の実技を教えた。門人40人以上。1826年、シーボルト江戸に上る。日本橋長崎屋で宇田川榕庵に医学を教え、持参の顕微鏡を与えた。

1828年、シーボルト事件（間宮林蔵から盗んだという）。

1829年、帰国。12月8日、妻おたき・長女おいねを残し、高良齋・二宮敬作にあとを託し、帰国。

1859年、シーボルト再来日。8月4日、子息13才と再来日。おたき・おいね・二宮敬作・三瀬周

三がむかえ、長崎から横浜・東京に出て、幕府に参内。1862年、帰国した。

(14) 1832年（天保3）

「瘍科新選」5冊、西洋外科全書の始め——杉田立郷訳。外科書（奥）プレンキ J.J.Plenc (1738-1807)。外科全般系統書の始め。

「外科手術纂要」1冊著——杉田立郷。

(15) 1843年（天保14）

「和蘭陀国憲綱」——杉田成郷（1817-1859）。

幕議は秘書として公表しなかった。

(16) 1848年（嘉永1）

福井藩洋方を採用—松平慶永、半井仲庵（-1871）、笠原良策（1809-1880）、大岩主一（-1861）。漢方医の非難を排して、福井藩は洋方を採用した前記4人の尽力による。

半井仲庵——名は保。1871年（M4）12月28日歿、60才。足羽山招魂社側に葬る。

大岩主一——丹生郡天津村在田の法満寺の4男。福井町医。1862年（文久2）8月8日、江戸在勤中コレラにて歿す、53才。

(17) 1849年（嘉永2）

「フーフエランド医戒」完訳——杉田成郷（1817-1859）、Hufeland Christoph Wilhelm（1762-1836）。

他に「フーフエランド長生術」（1797）—辻恕介の「長生術」訳。東独= NordthüringenのLangensalza、ワイマールの医師。「フーフエランド経験医事論」（1836）—（緒方洪庵「病理学通論」1847）。1810年ベルリン大学開校、教授、医学部長。1836年8月歿。

「医科道義篇」（1836）——これを杉田成郷が日本訳したもの。

1838年、Hagemann H.H. 和蘭訳書を作る。緒方洪庵は扶氏医戒の元略の中に入れていない。

笠原良策（1809-1880）、牛痘取寄に京都で種痘。福井に種痘所開設。金沢・富山に分苗。長崎に瘡痂がモーニッケ（Mohnicke O.G.）によって1月29日に届いたことを、通詞穎川四郎八が、京都の日野鼎哉に通知した。日野より越前の笠原良策に通知した。笠原は藩命により長崎に向った途中京都に立寄る。長崎の穎川は孫2人に接種、善感痂を剥ぎ取る。急使を出して京都に到着していた日野の弟子桐山元中は我児に接手して善感した。笠原は長崎行を中止して京都に滞在し、痘菌雑説を研究した。日野の除痘館設立に協力し、官民の児に接種した。大阪の緒方洪庵の要請により笠原は下阪して痘種を携え、痘種を伝えた。

痘種を江戸へ移送——笠原良策。笠原は京都より江戸越前藩侍医半井元中・坪井信良に痘苗を送った。11月28日、江戸常盤藩邸に痘苗到着した。

北陸へ痘種搬布——笠原良策。笠原は、11月妻と2子を京都の除痘館に呼びよせ、2児に接種、善感させた。冬の積雪を冒して福井へ帰った。福井の浜町の自宅の隣に除痘館を開いた。富山・加賀藩にも痘苗を送った。福井藩の除痘館を設立するや良策は痘苗用具を献上し、自ら指揮

協力して官民等平等に除痘に尽力した。

「聴胸器用法略説」1冊——杉田成郷（1811—1859）。

蘭医モーニッケ、Mohnicke Otto Gottlieb（1814—1887）。日本最初の聴診器——通詞品川藤兵衛、杉田。6月29日、モーニッケ長崎に聴診器持参、通詞品川藤兵衛これを模造した。杉田玄郷、これを使用した。日本人最初の聴診器使用。これはチーク材で円筒形、長さ1尺、径は2分、3段ねじ込み、通空気向口径2分のものであった。

杉田玄郷——「治痘真訳」1冊著述。

橋本左内——大阪緒方洪庵適塾入門、塾頭、16才。1852年（嘉永5）19才、2月1日父の病により帰藩、同年10月8日、父歿す。11月家督相続する。藩主松平慶永に重用され、国事に奔走し、安政の大獄に囚われ、1859年（安政6）刑死。南千住小塚原回向院に埋葬す、26才。

(18) 1853年（嘉永6）

坪井信良（1823—1904）——高岡藩医佐渡養順の次男を松平慶永招聘す。信良は小石元瑞、坪井信道、緒方洪庵に從学する。信道はその才を愛し、長女米子（後の萬喜子）と結婚さす（1844年・弘化1）。1853年松平慶永の侍医となる（31才）。在職10年、1863年（文久3）辞任。この間、済生館医学所、明道館、洋書教学所の教授をする。幕府に用いられてからは蕃書調書教授補奥医師となる。明治維新後、静岡病院長。著書数十種、明治37年1月9日、東京で歿す（82才）。染井墓地に葬る。

(19) 1858年（安政5）

坪井信良、竹内玄同、將軍の奥医師に採用。徳川家定、病篤く、初めて蘭方医採用、6名。幕府、蘭学医禁止令解除。

(20) 1860年（万延1）

福井藩、キンストレーキ購入（♂）。長崎より船載3ヶの中1ヶ、800円。日本最初の買入れ。明治2年、女体模型も購入。

(21) 1862年（文久2）

「亜的兒（エーテル）吸入法試験説」著述——坪井信良（1825—1904）。

(22) 1864年（元治1）

「侃斯達篤内科書」20冊訳著——同上。

(23) 1865年（慶応1）

1月2日、長崎ボードウィンに修学——橋本綱常（1845—1909）。

○（和）Baudin Antonius Franciscus（1822—1885）

オランダ一等軍医、ウトレヒト陸軍軍医学校で教鞭をとる。眼科生理学にくわしく、多くの日本人が長崎遊学を志した。

前任のポンパ（Pompe von Meerde Voort, 1829—1908）は、1860年来日。長崎養成所を創立した人で、1865年精得館に改称、1863年帰国した。

記要発刊を祝し、明治開明期の郷土医学界の基礎を築いた人々の覚書

ボードウインは、1869年（M2）から大阪医学校で講義した。1870年6月、東大東校に招かれ（西郷隆盛の銅像横、同所に野口英世、ボードウインの碑）、2ヶ月間講義。1870年10月、帰国（61才）。

順天堂塾生最盛期——塾長、佐藤尚中。東大初代校長。

在塾生 110人—佐倉藩12人、越前藩16人（最多数）、中部36人、関東27人、東北12人、九州6人、中国4人。

日下部太郎（1844—1870）21才。米国ラトガース大学留学。明治3年歿。福井藩最初の留学生。本名、八木八十八。2月13日、長崎出帆。1870年4月13日、ラトガース留学中、死。福井市立図書館庭にグリフィス（ラトガース大学長）と共に両名の記念碑あり。又、ラトガース大学接続地に墓あり、大日本越前日下部太郎墓と裏面にあり。昨年、堂下健二氏（福井市在住）と知事、市長は同所にて仏式にて展墓せり。

ラトガース大学—ニューヨークとフィラデルフィア の中間にある New Brunswick 市にある大学。

(24) 1867（慶応3）

「健全学」訳述（西洋衛生学書）——杉田玄端（1818—1889）

（英）ローベルト・ゼームスソン原著。ゲソントヘイドレール1856年版（和）。イルデ・プロイン・コプスの訳書。西洋衛生学の書。

吉野徳太郎、江戸に生る（1834年、天保5）。杉田玄郷の門に入る。1838年猶子となり、杉田玄瑞と称す。1845年、江戸に開業。1846年、杉田玄白の嗣子となる。1865年（慶応1）、外国奉行支配翻訳御用頭取。1878年（M11）、共立病院創立。明治22年10月7日歿、72才。

(25) 1868年（M1）

杉田定一——大阪に遊学、理化学を学ぶ。杉田鶉山。衆議院議長・北海道長官・貴族院議員。昭和4年3月23日歿、79才。

戊辰の役に橋本綱常（1845—1909）従軍。福井藩の綱常兄綱維（軍医長格）と従軍。Gross S. D. (1859), ストローマイエルStrohmyer G. F. L. の外科書（1855）、ベルナールド Bernard Huefte の医学書、ニーマイエルNiemyer F. V. の内科書と小手術器械を携行した。1862年、長崎でシーボルトにつき修学。1864年、ボードウインにつき勉学。江戸に出て、松本塾で洋学に専念。左内の実弟。

○1859年（米）——Gross Samuel David (1805—1885)。Jefferson 医大教授の外科書。外科疾患、病理診断、手術治療法の系統的記述書。1859年版——止血、外物除去、創口接合、膿毒、破傷風、砲創、銃創の詳記。

○1855年（独）——Strohmyer Georg Friedrich Louis (1804—1876)の外科書(Handbuch der Chirurgie)。独軍陣外科の大家。病理解剖を主とした外科書。

高瀬 武平

- 1856年——Bernard Huefteの手術図解。アムステルダム版。
- 1868年（独）——Niemyer Felix von（1820-1871）の内科書。
- 1869年（M2）——理化学新説。舎密局開講之説刊行。三崎嘯輔（1848-1873）。大阪舎密局教頭ハラタマ講述，助教授三崎編。

○（和）ハラタマ（Gratama Koenraad Wooter，1831-1888）

アッセン生れ。1866年，来日，長崎養成所開成所教師。1868年，大阪病院。1869年，舎密局教師。1871年，帰国。1886年，ヘーグ陸軍病院長（中佐）。1888年，歿。

大阪舎密局とは大阪に新設された理化学校。ハラタマは長崎精徳館教師。幕府の命で三崎嘯輔・佐藤道碩と出府したが，幕府瓦解で新政府の指示で三崎をつれて下阪した。大阪舎密局開設に尽力した。舎密セーミは蘭語 Chemie，中国では早くから化学と意識していた。1870年，大阪理学校に改称。更に大阪開成所。1886年に第三高等中学校。1889年，京都市吉田に移転。1894年，第三高等学校になる。

(26) 1869年（M2）

日本最初の化学教官——三崎嘯輔（1818-1873）。福井藩三崎分家の1人。1863年，江戸に出て大鳥圭介に学び，1865年，長崎蘭医ハラタマに修学。1869年，大阪舎密局助教授。1871年，江戸にて文部大助教授，大学東校，文部教師・化学教授。1873年，福井で急死，27才。安養寺に葬る。著書——「薬物雑物試験表」，「試験階梯」・「定性試験升屋」・「舎密局開講之説」・「化学器械図説」。

(27) 1871年（M4）

米国理学士グリフィス，福井明新館に着任。

Griffis William Eliot（1843生）。理化学を教授。大学教師岩瀬龍太郎を招き，通訳。グリフィスはフィラデルフィア生れ。ラトガース大学卒。日下部太郎と親交。1870年12月29日，横浜着。東京に40日，そこで2週間講義。1871年2月22日，船で神戸上陸，陸路福井へ。

日本最初の理化学実験室開設。Griffis W. E.，教鞭をとり，英米両国から器械・標品，薬品，参考書を購入。理化学を教え，俊秀，幼年生にドイツ語を授けた。午後は定性分析，定量分析の練習，藩内の鉱石分析。帰館後に有志に科学宗教上の講義をする。太政官の招聘で上京。廃藩で学生上京。衰運をたどる。8月12日，藩主松平茂昭，廃藩告别す。

グリフィスと福井。1871年1月，開成学校（元大学南校）御雇教師となる。理化学教授。1874年（M7）7月帰米。1926年（T15）12月13日，再来日。夫人と共に4月25日福井着。29日退去。1928年（S3）2月5日，米国フロリダ州ウインターパーク別荘で病歿，86才。家族，夫人，2男1女あり。1928年（S3）9月，夫人より日時計寄贈。足羽山の歴史館に保存さる。

(28) 1872年（M5）

「癰疽治範」1冊，「産科宝函」1冊訳書——杉田玄瑞（1818-1889）。

「解剖訓蒙」，「解剖訓蒙図」——松村矩明（1842-1871）。大野藩侍医。1861年，（米）

紀要発刊を祝し、明治開明期の郷土医学界の基礎を築いた人々の覚書

ジョセフ・レデ原著20巻の1-15巻訳。大学大助教授。文部省教授，大阪医学校長。

ドイツ医学の橋本綱常（1845-1901）。ベルリン大学，ウルツブルグ大学でリンヘルト（外科），ゲルハルト（内科）の準助手。ウィーン大学ビルロードに学び，1877年（M10）帰国。

(29) 1876年（M9）

京都府立病院長，医学校長，半井澄（1846-1898）。明治5年，療病院医学校創立に参画。外科講師。ヨンケル，マンスフェルド，シヨイベ等に歴属，苦勞し，院長兼校長になる。1886年，京都癲狂病院院長兼務。1888年，私立東山病院を開設。福井藩医半井晩香の嫡子で，福井に生る（1846）。

(30) 1877年（M10）

橋本綱常，西南の役に従軍（2-7月）。6月18日，ドイツより帰国。7月6日，陸軍軍監に任官。7月23日，長崎へ出張。西南の役にリスター消毒法，ドイツ仕込の新医術導入，1878年，東大教授となる。

「リスター消毒綱常論」訳著——橋本綱常・足立寛。1866年，Lister J. L. B.，石炭酸消毒で手術成功。彼はグラスゴー大学教授（1860）。1867年，リスター消毒法発表。複雑骨折11例，手術成功。1869年，エジンバラ大学教授。1877年，ロンドン大学教授。

(31) 1881年（M14）

盲腸周囲膿瘍手術成功——橋本綱常（1845-1909），患者は塩田広重，東大教授（1901年，第3回外科学会会長）の伯母で，救命した。

(32) 1884年（M17）

敦賀・長浜，鉄道開通。長浜で東海道線に連絡（4月16日）。

III むすび

1. 明治開明に前後，又それに膚接して西洋医学の導入に貢献した越前・小浜藩士の名称とその略歴につき覚書風に列記した。
2. 不明・不詳の点が多く，今後機会を捉えて各位の努力により訂正・補足を希望する。
3. 本文の骨子は，福井市在住の小林保正氏（外科医開業）—北陸医史学会員—のヒントを得た。記して感謝の意を表す。
4. 文中（M○ T○ S○）とは，明治○年，大正○年，昭和○年を意味した。
5. 年代その他については必ずしも正確を期し難いので，お気付の点は補足を希望する。
（小林保正氏は福井市照手1-10-19，Tel. (0776) -23-0571。）
6. 姓又は姓名の下に線のあるものは，福井藩ないし小浜藩出身を示す。